

新規採用教職員辞令交付式  
教育長講話  
「新任教職員に期待するもの」

◇日 時：平成30年4月2日（月）

◇場 所：県立郡山高等学校



辞令交付



教育長講話

## 1 はじめに

皆さん、こんにちは。奈良県の教育長をしている吉田です。私は高等学校で数学の教員をしていました。教師としての生活は20年、それから教育委員会の生活が20年となっています。平成11年に教育委員会の教職員課に異動しましたが、その当時の新規採用教職員は全員でたった41名でした。今年は364名の皆さんを私の後輩として採用することができました。当時と比べますと約十倍の採用です。この十倍の人の力が何十倍あるいは百倍の力となって発揮され、頼もしい後輩に育っていただければという思いをもって、今私はこの場に立っています。中には採用試験に何度もチャレンジされ、やっと合格された方もいらっしゃるでしょう。新規採用の皆さん、どうか心機一転、新しい気持ちで初心を忘れずに教壇に立ってほしいと思います。

## 2 これからの社会と教育について

私が教員になったのは昭和53年です。それから40年が過ぎて、皆さんは今、採用されました。おそらく今後は定年の延長があり、65才まで働く必要があるかもしれませんので、40年近く、皆さんは働いていくことになるでしょう。40年が経てばどんな社会が訪れているのか、子どもを育てるためには、それを想像することも必要です。さあ、みんなでこれからの社会を想像してみましましょうか。そして、その上でこれからの子どもにはどのような力を付けてあげる必要があるのかということと一緒に考えてほしいと思います。

2020年には東京オリンピックが開催されます。それに向けてトヨタやホンダなどは人工知能が人間に替わって運転する、いわゆるセルフドライビングカーの実現を目指しています。20

25年頃には人工知能、いわゆるAIが言葉の意味を理解して自動翻訳や自動通訳を行うことができるようになるだろうという予想もされています。例えば、現在1台のコンピュータは1000ドル、10万円程度ですが、その計算能力は2010年前後でネズミの脳、2020年代には人間一人の脳と同等になると言われています。そして、2045年になると10万円のコンピュータ1台が全人類の脳に匹敵する、コンピュータが全人類の知性を超えてしまう時代が来ると言われています。そんな未来のことを「シンギュラリティ」＝特異点と言いますが、そのシンギュラリティは2045年に来ると予想されているのです。

この人工知能の進化について具体的な例を挙げますと、一昨年(2017年)の3月に、イギリスのディープマインド社が開発した囲碁の人工知能「アルファ碁」が、世界のトップの棋士を破ったというニュースが世界を驚かせました。それから更に進化を遂げ、アルファ碁は世界のあらゆる強豪を打ち負かして、連勝を重ねているようです。このアルファ碁は3000万の棋譜を読み込んでそれを覚えるだけではなく、それを手本として自らを対戦相手にしながら学習していく、いわゆるディープラーニング、深層学習を繰り返しながら力を付けていくということです。

また、2021年の東大合格を目指した人工知能の「東ロボくん」が、一昨年の東大二次の模擬テストの数学で偏差値76を叩き出したことも話題になりました。しかし、未だに人工知能は「靴の紐がほどけたら歩きにくい」というような普通の常識が通じない。したがって読解力がない。これでは、国語の読解の試験を突破することが見通せない、という記事も昨年出ました。

そして、2030年になると、今ある仕事の半数が機械に奪われてしまう、そんな可能性があるという学者がいます。例えば弁護士をサポートするような仕事、膨大な資料から判例を探すわけですが、人間に代わってAIがかなりのスピードで判例を引っ張り出してくる、そんな時代になります。しかし、世の中に今どんなものが足りないか、どんな商品が必要か、どんなサービスをすべきなのか、などといったことをAIが自分で調整するということはまずあり得ません。例えば、俳優、保育士、ケアマネージャー、現場監督、そのような仕事は人間向きであろうと言われています。教員も人間向きであろうと私は信じています。

やはり、今後の人間にとっていちばん必要な力、いちばん武器になる力というのは創造する力、クリエイティブな力であると思っています。そしてその力を生み出す原動力というのは、何かを好きになったり夢中になったりすることではないかと思います。「好きこそものの上手なれ」という言葉がありますが、この領域はAIには到達できない領域であると思います。

ところが、こんな調査結果があります。アドビシステムズという会社の調査です。実は、奈良県教育委員会とアドビシステムズは協定を結んでいます。高校や特別支援学校では、県立学校のコンピュータソフトとして、アドビシステムズが使えるようになっています。そのアドビシステムズがイギリス、アメリカ、日本のZ世代(Z世代というのは12才から18才)に調査を行いました。子ども自身に「自分は創造的であると思いますか」という調査をしました。イギリスのZ世代は37パーセント、創造的であると回答しました。アメリカのZ世代は47パーセント、創造的であると回答しました。日本のZ世代はいくらだと思いませんか。日本のZ世代は、なんと8パーセント。一割にも満たない。次に、教師に「子どもは創造的であると思うか」と聞きました。教師にこれを聞いたら、イギリスの教師は51パーセントでした。アメリカの教師は69パーセントでした。さあ、日本の教師は何パーセントだと思いませんか。なんと2パーセント。日本

の教師は2パーセントの子どもしか創造力がないと回答したのです。アメリカやイギリスとは、教育のコンテンツ、内容に大きな違いがあるかもしれません。しかし、皆さんは新しい学習指導要領の下で新しい指導をしていかなければなりません。子どもが創造力豊かに育つ、そんな教育をしていく必要があります。自分が担当した子どもたちについて、自信をもって「創造力がついている」「磨かれている」「身に付いている」と思える、そんな教育をしてほしいと思います。

### 3 魅力ある人間性について

皆さんには、子どもたちの記憶に残る教職員、事務職員になってほしいと思います。先ほど宣誓してくれた代表の方は、中学校の先生の影響を受けて自分は教員になることを目指したと言っていました。私は小学校6年生の時の先生が最も記憶に残っています。私が小学校6年から中学校に入るとき、二つのことをしないといけませんでした。まず一つ目は、丸坊主にすること。それから二つ目は、男子は運動部に入ること。しかし、当時の私は中学校でどんな部活動をしたらいいのかわかりませんでした。そんな時、小学校6年の担任の先生が「君はバレーボール部に入りなさい。バレーボール部に入って勉強との両立をしっかりと図りなさい。」そんなことをおっしゃいました。そうやって、小学校の先生にどのような部活動に入るかということをおっしゃってバレーボール部に入りました。そして、バレーボールに没頭し、充実した3年間を送りました。

今年の2月に冬季オリンピックで金メダルを取った小平奈緒選手のことを記憶に残っている人はたいへん多いと思います。彼女については競技における強さだけではなく、くちびるに指を一本立てて「静かに」といったポーズ、その姿に感動した人も多かったのではないのでしょうか。ライバルの韓国選手が滑りやすいように、騒いでいる会場を静かにさせました。とても人間的な選手だと思います。まさしく一流の選手ですね。小平選手がこのような人間になったその理由の一つに、お父さんの存在があったと私は思っています。小平選手がアイススケートを始めた3歳のころは、お父さんがコーチ役だったようです。まず、実業団の選手の映像や試合をお父さんと一緒に見ながら、「足の動きはこのようにしているね」などというような会話をしながらコーチしていたそうです。そして、彼女が小学生になると、今度は指示するのではなく、自分で練習メニューを作りなさいという指導をされました。つまり、人から単に教わるのではなく、大事なことは自分で発見していくというのがお父さんの考え方でした。そのように小平選手自身にも考えさせて練習に付き合いました。そういったお父さんの姿勢が小平選手の才能をじっくりと伸ばしていったのではないのでしょうか。お父さんのコーチングから、小平選手は「与えられるものは有限、求めるものは無限」そういった人生のモットーを学んだと言っています。人から与えられるものには限りがあります。しかし、自分が求めるものには限りがありません。だからこそ、「明日死ぬかのように生きよ。永遠に生きるかのように学べ。」というガンジーの言葉にも彼女は感化され、あくなき探究心で技術を磨き、さらなる記録に今もチャレンジし続けています。

このような父親の指導というのは、子どもたちと教職員のあり方を示唆してくれていると思います。子どもたちには愛情深く、基礎となる知恵や知識を与え、与えすぎない。子どもたちに自分でできた、分かったと実感をさせる。子どもたちの状況を見極め、助けを必要としているときには適切な助言を与え、自らの足で立とうとしている時や考えようとしている時にはじっと待つ。有名な教育学者ウィリアム・アーサー・ウォードの言葉にこんな言葉があります。「平凡な教師は

言って聞かせるだけ、よい教師は説明ができる、優秀な教師は自らそれをやってみせる、最高の教師は子どもの心に火を付ける」皆さんも子どもの心に火を付ける、そんな教職員に、事務職員になってほしいと思います。

では、教職員として必要な力は何でしょう。私もいろいろと経験してきましたが、必要な力を一つ挙げるとしたら、それはコミュニケーション能力です。教職員にとってコミュニケーションがとれないということは大きな痛手になります。コミュニケーション能力がやはり大切です。そして、コミュニケーションをとるためには発信と受信をする必要があります。発信力においては、仮に言葉が通じなくても気持ちや思いを相手に理解してもらい、そういった気持ちが大切になってきます。大阪ビジネスフロンティア高校では、お笑いタレントの出川哲朗さんのいわゆる「出川イングリッシュ」を活用して外国人に対して観光案内をする、そういった実践的な研修を実施して子どもたちの英語での発信力を高めようとしています。また、我々の時代では「巨人・大鵬・卵焼き」という流行語がありましたが、その巨人には偉大なる王と長嶋という選手がいました。王は記録に残る選手、長嶋は記憶に残る選手と言われていました。この長嶋という選手は、外国人選手とボディランゲージでコミュニケーションをとるのが非常に得意だったようです。また、長嶋選手にはこんな逸話があります。立教大学の英語の卒業試験で、「I live in Tokyo. 私は東京に住んでいます。」を過去形に直す問題が出たとき、なんと長嶋選手は、「I live in EDO.」と解答しました。東京を過去形にしましたね。このような英語力で外国の選手、監督、コーチとコミュニケーションをとっていたそうです。出川さんや長嶋選手のように、語学の力が高くなくともコミュニケーションができる、発信できるということもあるということですね。

また、受信をするときにはアンテナをしっかりと立てていかなければなりません。教職員でいうと、同僚は何を考えているのか、子どもは何を考えているのか、保護者は何を考えているのか、世の中で今何が起きているのか、といったことを受信できるアンテナです。オリンピックを見ることも研修になります。単に見るだけでは研修にはなりませんが、そのことをどのように子どもたちに伝えようかと考えれば研修になります。また、何より40人のクラスをもった時に、40人の子どもたちの心を、小さい電波であっても、弱い電波であっても受信する感度のアンテナでなければなりません。40人ともに小さく弱い電波であっても受信できる、そんなアンテナを立てる必要があります。もちろん多くのアンテナを立てるためには、小平選手のように皆さん方もしっかり学び続ける必要があります。教えることの専門家は学ぶことの専門家であるといっても過言ではありません。

#### 4 奈良県の教員研修について

県では、皆さん方が初任者のころから学び続けることができる環境を、教育研究所を中心に整えております。最近も、大学院で学べるシステムを新しくつくりました。従来は大学院で学ぶ場合は、二年間の授業料を払う必要がありましたが、本年度から1年目は大学院に行ってもらい、2年目には大学院と教育研究所で研修してもらうことにより、2年目の授業料は不要となりました。このように教職大学院での研修を制度化しました。皆さんが中堅教員になられるころ、再度大学院に就いて勉強し直してみよう、そんな先生がどんどん増えることを願っています。

## 5 辞令書、宣誓書について

それから、辞令書と宣誓書について少しだけ話をします。本日、皆さんに辞令書をお渡ししました。その辞令書のいちばん上に皆さんを採用すると書いてあります。県立学校に着任される皆さんは県に採用された県の職員。市町村立学校に着任される皆さんはその市町村で採用された市町村の職員と認識してください。ただ、市町村で採用された皆さんも県費負担教職員ですので、給料は全て県でお支払いしています。つまり、県の税金で皆さんの給料は賄われているということです。なんと皆さんの給料だけで奈良県の予算の23パーセントを占めているということです。教育に占める人件費が県の予算の中で非常に大きくなっているということを認識してほしいと思います。

それから宣誓書について少し話をします。今日お持ちいただいた宣誓書におけるサービスの宣誓とは、地方公務員法第31条に規定されています。誰に宣誓するのか、それはもちろん県民です。市町村立の学校に採用されたら市町村の住民に対して宣誓をするということです。県民、それから市町村民に宣誓するわけですから、その意識をしっかりとってください。

## 6 おわりに

最後に私の大好きな物理学者アルベルト・アインシュタインの言葉を贈ります。彼は『晩年に想う』という著書の中で語っています。「教育とは、学校で習った全てのことを忘れてしまった後に、自分の中に残るものをいう」のだと。知識を伝授することだけが教育ではないのだということです。我々は教えたことを子どもたちが覚えていることが教育の全てだと思っています。しかし、アインシュタインは学校で習った全てのことは、いずれは忘れ去られるもので、新しいことをどんどん吸収、勉強していかなければならない、そういった姿勢や意欲を子どもたちに身に付けさせるのが教職員の仕事であると断言しています。

どうか皆さん、健康に留意してがんばってください。しんどくなったら私に相談に来てくれれば助けます。また、研究所にも皆さん方を支援するスタッフがたくさんいます。奈良県の教育のために私と一緒にがんばってください。どうもありがとうございました。